

16 寺社と人びとの信仰

■ 禅宗寺院と礼拝大明神



伝開山月堂宗秋禪師坐像(福生市 福生院所蔵) 寄
木造り。僧形像で禪宗寺院でまつられる頂相彫刻に
あたる。室町時代の製作と思われる。

臨濟宗名派の展開

臨濟宗は、鎌倉時代に宋から栄西によつてたらされた禪宗の一派で、鎌倉、室町時代を通じて武士や公家の庇護をうけて隆盛をみた宗派である。なかでも建長寺は鎌倉五山の第一として、その末寺は鎌倉時代後期から相模、武藏を中心に関東に広がり、南北朝の内乱期には関東臨濟宗の中心として、さらには発展をみせた。武藏国の同派の展開は、多摩川流域でとくに顕著であつた。

多摩川流域の建長寺派の寺院には、足利氏との関

係を伝える寺院が多い。さらに、多摩川上流域に建てられた板碑には、北朝年号すなわち足利方の年号が刻まれている。このことは、南北朝時代、北朝が優勢になるとともに、足利氏が保護する臨済宗が隆盛となり、寺院が建立されていったことを示しているのであろう。

清石院と長徳寺は、建長寺派のあきる野市の広徳寺末寺である。清石院は応永年間（一三九四～一四二七年）の創建と伝えられ、古くは正蓮寺（青蓮寺）とよんでいたという。江戸時代になつて、中興開基加藤勘助重正（正保一年～一六四五）没、法名清石院殿一便宗見大居士の法名を取つて寺号を改めたものである。長徳寺は長徳年間（九九五～九八年）の創建で、年号を取つて寺号としたという。しかし開山の旨外宗の寂年（寛正元年～一四六〇）から考へると室町時代中ごろの創建と思われ、市内でいちばん古い寺ということになろう。

福生院は鎌倉五山第三の寿福寺末の普門寺（あきる野市）末寺である。山号を玉應山といい、寺伝によれば一四二一年（応永十八）、足利義持を開基として創建されたという。開創当時は小さい寺院であつたが、貞享年間（一六八四～八七年）に諸堂が整えられてから、現在のような規模になつたといわれている。



宇賀神画像(福生市所蔵)
宇賀神社は白的一授
蛇神ともいい、福の神の福德をまつくる。
熊川神社は白的一授
仁説で白的一授の習合

■礼拝大明神と生石命

礼拝大明神は、生石命は、
石命を祭神として創建された。この神社
に關する資料でもつとも古いものは、江

戸時代初頭の一五九七年（慶長二）二月十六日の年記をもつ棟札である。この棟札によれば、この年に願主一乗坊、石川、野嶋氏ほかの郷中の人がとの喜捨によって現本殿が建立されたことがわかる。もちろん、それ以前から人びとの信仰を集めていたものと考えられ、中世からの系譜を引くものと思われる。また一五九〇年（天正十八）の八王子城落城のとき、天台宗円通寺（八王子市）の僧侶がここへ難を逃ってきたという伝承もある。一八七〇年（明治三）に熊川神社と改称、祭神は大国主命とされた。

■半沢覚円坊と真福寺

真福寺は由緒書によれば、一三五一年（文和元・正平七）の開創で、当時は多摩郡柚井郷松竹村（八王子市）にあったという。一四八〇年（文明十二）松竹城主大石道俊が武運長久を祈願して不動堂をつくり、その後大永年間（一五二一～二七年）その子源左衛門が城を滝山に移すと、この堂も滝山に移された。北条氏照が城を八王子の神護寺山に移したとき、覚円坊を多摩郡の修驗の總触頭にしたといわれる。

熊川の真福寺は滝山城の祈願所であり、半沢

覚円坊がここを拠点に活躍していた。修驗道は、中世以降、大別すれば熊野を拠点とした本山派と、吉野を拠点とした当山派に分けられる。のうちに本山派は天台宗の京都聖護院門跡から御教書が出されているところから、天台宗の本山派修驗であったと考えられている。

不動明王立像（福生市 真福寺所蔵） 真福寺本尊。覚円坊の刻像と伝える。

一五六五年（永禄八）の「北条氏照判物（写）」





高野山高室院(和歌山県高野山) 慈眼院
(高野山峯之防)は、現在廃寺となり高室
院院内に多数保存されている。

と、年代はわからないが「高野山慈眼院隆寛書状」がある。「氏照判物(写)」は武藏国多西郡の半沢覚円坊を先達とする人びとが、紀伊高野山参詣の際利用する宿坊を、往生院谷の峯の坊とすることを決めたものである。弘法大師が開いた高野山は、靈山として、また多くの寺領莊園をもつ莊園領主として繁栄したが、戦国時代になると高野山は戦国大名と経済的な関係を深めていった。領内の人びとが参詣する際には、大名と関係をもつ宿坊に泊まるよう決められたのである。

北条氏照は、覚円坊という修験者を領内の触頭としたが、覚円坊は本山派先達として熊野参詣や伊勢参詣の先達もし、同時に宗派を超えた靈山である高野山への参詣の先達も、当然務めたであろう。もう一通は慈眼院隆寛の書状で、高野山宿坊の高室院と檀那をめぐる訴訟があり、北条氏直と氏照の朱印状が決め手となり、多西郡はすべて慈眼院の檀那であることが認められたというものである。『新編武藏風土記稿』に、八王子城落城の際の北条方の戦死者約一五〇人ほどが記されているが、その筆頭に半沢覚源律师(法名榮譽林体)がある。この名が半沢覚円坊であると思われる。一五九〇年(天正十八)六月二十二日、豊臣秀吉配下の前田利家と上杉景勝の軍勢数万騎が八王子城を襲つたが、半沢覚円坊は、大手滝口で槍にかかるて命を落としたといわれている。

■板碑にみる人びとの信仰

永昌院や長徳寺などに、偏平な緑色の石でつくられた墓石のようなものが残されている。板碑といい、中世につくられた供養塔婆である。仏教の普及と定着を背景に、死者の菩提をとむらい、あるいは自分

自身の死後の安樂を求めるための葬送儀礼の一つとして建てられた石の供養塔である。頭部を三角形にしてその下に二条の切込みを入れ、本尊を梵字^{ぼんじ}や画像などであらわし、下段には造立の年月日あるいは被供養者の忌日や人名などの、いわゆる銘文を刻むものが通例である。

関東地方の、秩父産の青石（緑泥片岩）でつくられたものが数も多く、武藏型板碑としてよく知られている。市内に現存する板碑は六九基で、市内の一九か所にある。このうち市外からもたらされたものが八基あるので、市域の板碑は六一基である。ただしもともとあつた位置を特定できるものは少なく、本来の分布状況をることはできないが、傾向としては近世以前に開発が進んでいたところに多くあつたようである。福生周辺では一五世紀半ばにもつとも多く造立されているが、これは、武藏型板碑全体の最盛期から約一世紀遅れている。このことは、福生が武藏型板碑の分布圏の比較的辺地に位置していることによるものと思われる。

板碑は、だれが何のために造立したものであろうか。市域にある五基の板碑の下半分には、造立された年月日や、建立の目的を示す文章が刻まれているが、市域にある五基の内容はすべて逆修^{さかぞく}で、これは生前に自分の死後の安樂を願つて造立するもので、故人の追善を示す銘文を刻むものはみられない。

■仏像を刻んだ墓石

福生の板碑でもつとも年代が新しいものは一五一〇年（永正七）で、その後の約一〇〇年間に市内には石造物はみられない。この空白のあと一七世紀半ばから、五輪塔や宝篋印塔などの石塔がつくられるようになつてきたが、これらはいわば限られた階層の人



嘉元二年銘釈迦一尊板碑(福生市永昌院所蔵) 福生市内最古の1304年(嘉元2)の紀年銘を有する板碑。



自然石舟型墓標 如意輪觀音半迦像(1720年[享保5]長徳寺墓地)



自然石舟型墓標 聖觀世音菩薩立像(1688年[貞享5]長徳寺墓地)



自然石舟型墓標 阿彌陀如來座像(1695年[元禄8]長徳寺墓地)



自然石舟型墓標 地藏菩薩立像(1723年[享保8]長徳寺墓地)

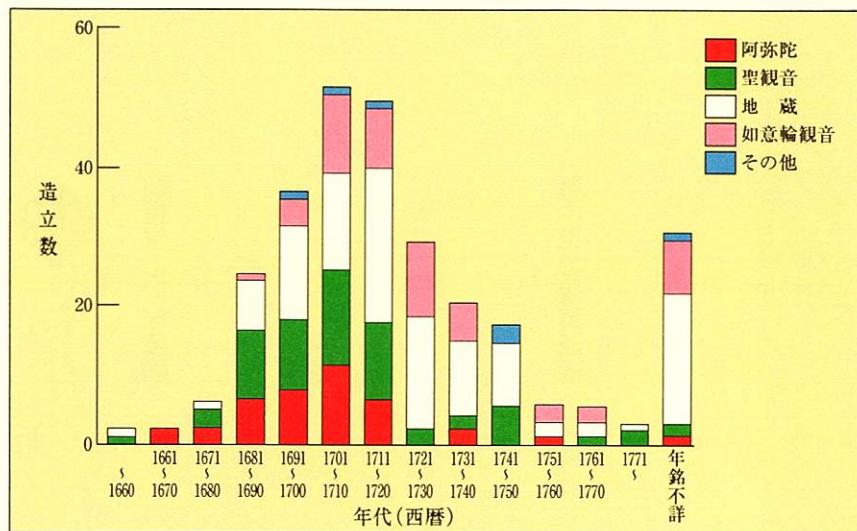
福生の自然石舟型墓標の材質の特徴は、玉石などとよばれる河原石を用いており、その岩質は石英閃綠岩のものに限られている。福生周辺で石英閃綠岩を産出するのは檜原村の秋川源流の三頭山だけであり、福生の自然石舟型墓標の原石は、三頭山起源の河原石を加工したものである。

また、自然石舟型墓標の形のうえでの最大の特徴は、墓標の正面に仏像が彫られていることである。自然石の凸面を利用して仏像が浮き出るようにした、い

びとが造立したものであつた。一般的な民衆が墓標を建てるようになつたのは一七世紀後半で、その代表的な墓標のスタイルが自然石舟型墓標であり、そのほか自然石文字型墓標、舟型墓標、板碑型墓標などがある。

江戸時代の墓標は、板碑型墓標から舟型墓標（自然石舟型墓標を含む）、

箱型・駒型墓標、角柱型墓標という変遷をたどつた。板碑型墓標や舟型墓標はその文様の配置などから、中世の板碑の流れを汲む供養塔といえる。自然石舟型墓標は板碑と同じように直接地中に基部を埋め込むものが多く、この点で板碑と共通点がみられる。



福生市内自然石舟型墓標の刻像種類別造立数の変遷

わゆる浮き彫りによるものと、自然石の平らな面をくり抜いてそのなかに仏像を残すものとがある。彫られている仏像はほぼ四種に限定される。古い時代には阿弥陀、聖観音が多いが、その後年代を経るごとに地蔵と如意輪觀音が多くなってくる。仏像のレリーフの下には、たいてい蓮の花や葉をモチーフとした模様が彫られている。

この蓮座文様の始まりは、中世の板碑の蓮座に端を発するものと考えられる。蓮座文様は、石材が固いことなどから、単純な線彫りのものが中心となっている。初期の文様はその大半が蓮葉であり、装飾的な色彩はあまり強くない。しかし自然石舟型墓標が多く建てられるようになると、蓮座文様もその種類がふえていった。

福生市内で確認されている自然石舟型墓標の総数は二七九基で、最古は清岩院墓地の一六五〇年（慶安三）のもので、最後は長徳寺長沢墓地の一七七六年（安永五）のものである。建てられた年代は一七〇〇年代初頭が多いが、この時代は元禄末期から宝永、享保年間にあたる。造立数は福生地域が多く、熊川地域が少ない。これは当時の人口動態とほぼ一致している。